

4 章 2017 年度 COC 事業による「地域貢献」

2017年度市民公開講座「地域住民が育てる大学生：～大学と地域との新しい協働のカタチ～」

2017年神戸市看護大学まちの保健室出前講座

平成29年度 神戸市看護大学COC市民公開講座



地域住民 が育てる 大学生



～大学と地域との新しい協働のカタチ～

「地域住民と共に学び、共に創る」大学教育を推進するCOC事業（Center of Community）に取り組んでいる大学の事例紹介や、地域連携教育に参加する学生・地域住民との交流や意見交換を行います。大学教育への参加に関心のある方、大学と協働して地域課題を解決していく方法を一緒に考えてみませんか？

【日時】 平成29年11月25日（土） [13:30～16:00]

【会場】 神戸市看護大学ホール（定員 500名）

参加
無料

13:00 開場

13:30 開会挨拶

13:35～14:35 【第1部 取り組み報告「大学で活かす地域住民の力」】

大学と地域との協働により地域課題を解決する人材育成、大学による地域貢献を紹介します

・COC事業で採択され、特色ある地域との協働活動の事例紹介

* 〔 高知大学：地域協働学部 准教授 中澤純治氏
地域連携推進センター 准教授 吉用武史氏 〕

* 教育ボランティアとして地域住民が授業に参加する唯一のプログラムの紹介

* (神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター 准教授 相原洋子氏)

14:35～15:00 — コーヒーブレイク・ポスターセッション —

お茶を飲みながら地域住民・大学教員・学生との懇親と交流をしましょう



15:00～16:00 【第2部 リレートーク・トークセッション】

・教育と地域貢献の一体化を目指した学部教育からの学び

(学生：高知大学、神戸市看護大学)

・教育ボランティア導入授業、継続看護教育による看護観、職業選択への影響

(神戸市看護大学卒業生)

・地域住民からみた教育ボランティア導入授業に対する感想

(菅の台地域民児協会会長 福田哲子氏/竜が台地域民児協会会長 高橋千栄子氏)

トークセッションでは、互いに質疑応答、意見交換しながら大学と地域との連携を展望します

主催：神戸市看護大学 共催：ひょうご神戸プラットフォーム 後援：神戸市

文部科学省
地(知)の拠点

※ひょうご神戸プラットフォームは、神戸大学を主体に、下記の団体が参画しています。

兵庫県立大学・神戸市看護大学・園田学園女子大学・兵庫県・神戸市・神戸商工会議所・兵庫県経営者協会・兵庫工業会・神戸新聞社

2017年度 市民公開講座

テーマ：地域住民が育てる大学生 ～大学と地域との新しい協働のカタチ～

平成 29 年 11 月 25 日（土）神戸市看護大学 地（知）の拠点整備（COC）事業 平成 29 年度市民公開講座を、本学ホールにおいて開催した。

本学では、現代 GP（平成 18～20 年度）において、大学と地域とのかかわりの構造的・機能的な変革をめざし、地域住民による教育ボランティア制度を教育の中に取り入れ、以降 10 年間大学と地域住民との連携と協力による看護教育を行ってきた。このような地域住民との協働教育の背景を踏まえ、神戸市にある大学として、今後ますます地域の中での学び、住民の暮らしに根ざした看護の実践が行える看護職の育成を目指している。

本市民公開講座は、文部科学省の COC 事業助成終了の年にあたり、高知大学から教員と学生、須磨区の民児協会長、本学卒業生と在学学生をお招きし、COC 事業を含む地域住民が参画する大学教育をふり返ると共に、大学と地域との協働の新しいあり方への示唆を得ることを目的として開催した。

【第一部 取り組み報告】座長：加藤憲司（神戸市看護大学 健康科学分野 教授）

<高知大学の取り組み>

高知大学は、本学と同年度に COC 事業校に採択され学生教育と地域貢献を一体化させた「地域協働学部」を設置し、ユニークかつ特異的な事業を展開し、中間評価では最高の S 評価を受けている。中澤氏からは「地域協働学部」の紹介、吉川氏からは高知大学における COC 事業の具体的な展開と教育効果を中心に講演いただく。



【高知大学 地域協働学部の紹介】

○中澤純治氏（高知大学 地域協働学部 教育研究部総合科学系 地域協働教育学部門 准教授）

◆地域協働学部設置の背景と趣旨

地域協働学部は、平成 27 年高知大学にできた新しい学部である。設置された背景に、大学の社会的使命を明確にした教育改革を文部科学省から求められた「国の大学教育政策上の要請」、高知県は日本の社会問題を 15 年先取りした『課題先進県』として「社会（地域）課題からの要請」、「学生の能力の実態からの要請」があった。「地域協働学部」設置の原動力となったのは、地域の課題は非常に複雑でいろいろな関係者が絡み合っており解決が困難で、みんなが参加して取り組むための協働を生み出す必要性を感じていたこと。また、大学の学問は、かなり高度に専門化、細分化されており、仕組みを変えてゆくような取り組みは、いろいろな人々の協力を得てしか解決できないことがわかってきたこと。そして、この問題解決を専門的にする組織を設け、持続的に地域に入り、地域に対する資本と人材を育成し、今活動している方々と一緒に取り組むことで互いに成長し、将来チャレンジにつなげられるようにしたい、と考えたことである。

学部名の「地域協働」は、地域の多様な人や組織が価値観の違いを超え、ともに考え行動する中で価値観の共有化を図り、地域課題を協力して解決方法を探り課題解決に取り組む機能である。

◆地域協働学部の教育目的と目指す人材像



本学部が目指す人材像は、地域理解力、企画立案力、協働実践力を基盤とした地域協働マネジメント力を修得させると共に、総合的かつ的確な判断力と何事も最後までやりぬく粘り強さを身につけさせることを目的とする。このことを通じて、①6次産業化人、②産業の地域協働リーダー、③行政の地域協働リーダー、④生活・文化の地域協働リーダーを育成することを目指しており、来年初めて卒業生を輩出する。

◆地域協働学部の教育内容とカリキュラム

1 学年 60 名、3 年生までの 180 名に対して、6 分野にわたる専任教員 24 名を配置している。学部の教育の柱として 4 年間で 600 時間地域に出かける実習を設定し、現場に出て自分の目で状況を確認し、ゼミで大学に持ち帰り、その内容を共有、理解、分析し不足する知識を補充するというサイクルを 4 年間続けてゆくものである。

1 年生では、地域にどのような登場人物がいて、どういう問題があり、課題は何か、現場で起きていることを自分の目で見て正しく理解する。2 年生では、それに対してどういうプランを作ればみんなを巻き込んで課題解決できるか考える。3 年生では、みんなで考えたプランを地域の人を巻き込んで一緒に実践する。4 年生は、それを論文という形で文字に落とし込んで、次に伝えていく作業をチームスタディ (PBL) としてグループで学習しながら、個人の学びを深めるサイクルを繰り返しながらの学びを 18 のフィールドで行っている。

具体的には、たくさんある中から、例えば限界集落で有名な嶺北地域で、限界集落における集落機能をどのようにして維持するのかを NEXCO 西日本が持っているアグリ事業と結びつけて地域活性化を考える授業や集落の機能を維持するための活動拠点である集落活動センターの運営、商品開発による経済的な自立を図るプロジェクトや、地域資源を活かした商品の販売と地域の活性化をどう結びつけるかという内容である。

◆「地域協働」をめぐる 3 つの誤解と「地域協働」の本質

「地域協働」は、新しいワードではあるが、元来我々の社会が持っていた仕組みであり、最先端でも時代の救世主でも何でもない。また、地域協働学部教育は、学生や大学が地域課題を解決するというよりも、一緒に活動して結果的に学生が育ち地域住民が育ち、解決に結びつくことを目指すが、地域課題をすべて解決する魔法の杖ではない。住民の方々が解決できるようにサポートしながら一緒に学びたいと考えている。さらに、学生にとって「地域 (協働)」での学びが大切であるが、キャンパスでの学びより地域での学びが重要と考えているのではなく、地域での良質な経験とそれを大学に持ち帰って座学で学ぶ有機的な学びのサイクルをまわすことこそが大切だと考えている。

「地域協働」の本質とは、表面的な課題解決ではなく、しなやかで強い「人と社会」を創り続けていく「協働的学び」である。本学部は、地域力を学生の学びと成長に活かして、学生の力を地域の再生と発展に活かす共存関係をスタートさせているので、今後地域協働という言葉聞いたときに高知でおもしろいことやっているなど思い出していただければ、と思う。

○吉用武史氏 (高知大学 地域連携推進センター 域学連携推進部門長 准教授)

高知大学地域連携推進センターは、中澤先生が所属する地域協働学部の他に医学部、理学部、工学部、農林海洋科学部、教育学部があるなかで、地域での教育や研究をするお手伝いをするような組織と理解してもらえればよい。

文部科学省国立大学改革プランより、各大学の強み・特色を最大限に活かし、自ら改善・発展する仕組みを構築することにより、持続的な「競争力」を持ち、高い付加価値を生み出す国立大学のあり

方が示された。その機能強化の方向性として「世界最高の教育研究の展開拠点」「全国的な教育研究拠点」「地域活性化の中核的拠点」の3つからの選択を求められ、高知大学は「地域活性化の中核的拠点」を選択した。高知大学はこの選択をする以前の10年以上前から地域との連携活動を積み重ねてきている。そのようななかで平成25年度から始まったCOC（センターオブコミュニティ：大学は地の中核的拠点となるべく組織的に確立する）事業の採択を受けた。



高知大学でおこなっているCOC事業は「高知大学インサイド・コミュニティ・システム」の名称で、高知大学が地域における知の中核でありたいという願いを込めてつけたものである。

このCOC事業の肝は、4名の地域コーディネーター（university block coordinator：UBC）が地域に常駐している点である。このUBCは、地域の声を聞き、共に考え、大学あるいは大学以外の企画との調整役となれるよう、教育研究、社会貢献という機能を地域で展開すべく行動する存在である。高知県は、神戸市の1/2くらいの人口が十数倍の面積で暮らしているため、地方の声を聴くために十数年前からワンストップ支援窓口で地域支援企画員（県庁職員）を配置していた。COC事業を始めるとあたり、地域からの信頼がありネットワークを築いているこの人たちとの連携を中心に据えた。この連携により、大学は地域に紹介してもらうことで気軽に相談してもらうことができ、行政にとっては大学の研究シーズや学生の力の活用を相談できるという互いのメリットがあり、新しい課題解決体制の構築をしてゆきたいと考えている。

具体事例の紹介としては、限界集落で理学部の学生が学生団体として、最初は閉鎖的で元気がなく不便というイメージを持って地域に入ったが、実際に自分の目で見た限界集落では目を疑うような素晴らしい景色が広がっており、自分たちができる得意なことで地域をつなげたいと思い、荒地にシャクヤクを600本咲かせ憩い集落にしたいとクラウドファンディングプロジェクトを立ち上げ、無事お金も集まり活動も進められている。これは住友生命の「YOUNG JAPAN ACTION」受賞など社会的な評価も受けているが、この活動の裏側にはUBCの嶺北地域担当がいて、コミュニティファンディングの企画、ファンドレイジングの手法などを実際に学生にやらせてみて、成功に結びつけたのも功績であり、現在学生はNPO法人を立ち上げて代表になり、彼に続く人も現れている。このようにあまり表にでないが、NPO法人の中間地点として組織基盤強化に対する知識提供や助言をおこない、立ち上げに寄与し調整しているのがUBCの果たしている仕事である。

大学としては、地域関連科目を増やしていき、課題探求実践セミナーを初年度必修科目として全学で取り組み、地域関連化することにより入学当初から地域の課題について学び、地域活性化に対する考え方を身につける機会を課していることが特徴的といえる。地域関連科目受講による学生の意識変化を学生の自己評価のアンケートによると、地域関連課目が増えるにつれ地域に対する近い関心が高まっていることがわかる。

さらに今後の展開として、地域関連科目と地域とのかかわり度合いで、まず地域を知る授業のフェーズ、地域の方と実際に会うような授業、あるいは地域の成り立ちを体験するような授業、さらに地域の方と一緒に何かをする協働する授業のように振り分け、このフェーズを経た一定の学生に地方創生推進士という資格を与えることにしている。これは、公的な資格ではないが、学生が地域に対する理解、愛情をもち、技術的に協働能力を持った人材であることを大学がお墨付きを与える仕組みと考えてもらえばよい。これにより学生の就職、とりわけ高知県内の就職に活かして欲しいというのが大学の狙いである。学部によっては、地域関連科目に差があるため、準正課（正課と同様に教員による

教育支援のもと行われている学生の自発的・主体的活動を原則とする取り組み)によりいろいろ経験できるような仕組みを作ってフォローしている。例えば、社長インターンシップでは、最初に社長の挨拶があるだけというようなよくあるインターンシップではなく、数日間社長に付きっぱなしで、リーダー論や経営術、信念を身をもって体験することを一部の企業にご協力いただいて実施している。その他にも UBC インターンシップ、えんむすび隊（学生が地域で活動するということがどういうことなのか、実際に体験するワンデイツアー）など他にも準正課プログラムとして用意しているところである。このような地域関連科目あるいは準正課を充実させていくことによって、アンケートから高知大学が地域の大学であるという認識が 7 割近い学生にあり、教職員や学生に高まっていることがわかる。このような COC 事業に対して文部科学省から最高の S 評価をいただき地域協働学部を中心として高く評価されている。

【教育ボランティア導入授業「地域住民が授業に参加する唯一のプログラム」の紹介】

○相原洋子（神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター 准教授）

神戸市看護大学も平成 25 年度に COC 事業に採択され、本年度が最終年度である。この講演のタイトルを「地域住民が授業に参加する唯一のプログラムの紹介」としたのは、ボランティアという名前をつけて地域住民と一緒にいる授業は、検索したところ本学以外にはなかったからである。



本学は平成 8 年に開学し、昨年度 20 周年を迎えた。阪神淡路大震災の記憶がまだ新しい翌年に開学し、地域自体が非常に混乱している時期に開学したところからも、地域社会に密着した大学であるという使命を持って取り組んできている。その開学 10 年後に文部科学省がいろいろな大学に補助金を出して支援する「現代 GP」という事業で、本学では一般住民の方が大学教育に関わる「教育ボランティア」という名称を用いておこなう授業を導入し、昨年度 10 年を迎えた。平成 25 年には、この COC 事業に採択され、少し発展的な形でこの教育が進んできている。

教育ボランティアとしてお願いしているのは、一般住民の方に学生が技術を提供する模擬患者役をしていただくといった医療看護系ではよくある取り組みに加えて、生活や健康の取り組みという普段のお話をさせていただくゲストスピーカーや、学生と一緒にグループワーク、地域に出向いて行う実習のときに家庭訪問の受け入れ、健康教育の模擬対象者となっていただくような取り組みをしている。ボランティアには、あくまでも自発的に参加するという一般的な定義があるが、本学の教育ボランティアさんにおいても、学生の教育に役立ちたいということをきっかけに登録いただいております、少し古いデータでは 145 人登録者がおられ、現在はもう少し増えている。

この COC 事業が始まり、これまで教育ボランティアさんの導入授業は大学にお越しいただき学内で行う授業がほとんどだったが、住民の暮らしを理解するには、より住民の暮らしに近い場所で行えるように、地域に学生が実際に出向いて地域住民の方にご協力いただくコラボ教育という名前で発展してきた。1 年生から 4 年生まですべての学年においてこのコラボ教育が導入されているのが大きな特徴である。具体的には、1 年生では学生と住民さんが一緒に講義を受けた後に意見交換をしたり、2 年生になると血圧などの測定にご協力をいただくというようなものがある。ここは非常に住民さんもよく理解いただき、地域の保健室としてたくさんの方にご参加いただいている。少し学年が上がると健康教育の授業で、例えば企業の雇用者を対象にしたもので、実際授業に参加されているのは高齢者であっても企業の雇用者を演じていただき健康教育を受けていただくこともある。4 年生になると、

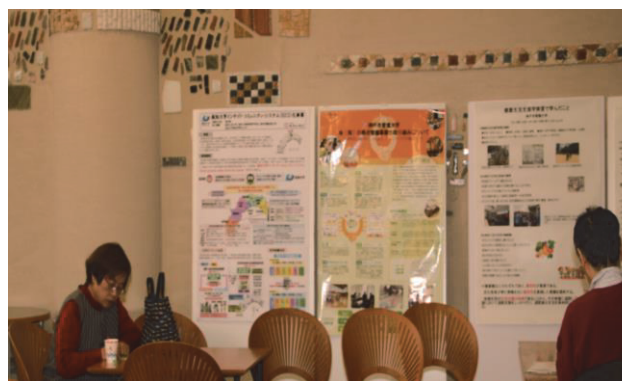
健康相談としていろいろな健康のことをお聞きしながら、学生がそれに対してどう指導していけばよいのかを考える授業をもっている。一般的に、ボランティアは参加する効果として生活満足度も健康もどの年代にとってもいいことがすでに研究で明らかになっている。これを参加される側の学生からの評価をアンケートからみると「地域のための大学として、理解、能力が深まりましたか」の問いに、「はい」と答えた学生は過半数いる半面、「わからない」と毎年4割ぐらいが答え、「先入観と違って意外と自分たちよりも健康的に暮らしている」との学びや、看護職としてどのようにアドバイスすればいいのかという気づきの場になっている。その後の就職の後どういう学びが役に立っているのか、今年、教育ボランティアの授業を受けた卒業生を対象にとったアンケートでは、8割の学生が教育ボランティア導入授業が今の看護師の業務に役立っていると回答している。

学生の取り組みがよかったというのも平成26年度から平成27年度は半数を越えた住民さんが答えてくださっていて、「病院という場所以外でリラックスできる」とか「若い人が地域に出てくると刺激になる」とか「学生の態度」の項目で好評を得ている。一方で、「自分の参加が教育に役立っていると思うか」の問いに対しては、上がってはいるがまだ半数には満たない。学生と接する場面というのは切り取られた部分のため、学生がそれを学んでどのようによかったのかというのは、まだまだ教育ボランティアさん自身が実感しにくいところがあるようだ。このように外に出て演習をする効果は、「周囲の人と健康に関する話をするようになった」という住民さん自身の意識の変化が少し増えているのと、地域住民の方の人間関係が薄く浅くなり住民同士で声をかけあう場がない中で、「交流の場」として「顔を合わせる場になっている」という評価も得ている。

最後に、昨年度外部評価を受けたときに、本学が10年間教育ボランティアの方に関わっていただいたのは大学の財産だとの言葉もいただいた。ただし、お互いにとってwin-winの関係になるためには、教育ボランティアさんが長年関わってきたことでどのような意識の変化があったり、これを機会に自分たちから地域での取り組みを始めるようになったのかなども大学側はみていかないといけないのではないか、というところを指摘されている。

【コーヒープレイク・ポスターセッション】

会場を高知大学神戸市看護大学のCOCに関連するポスターが置かれた学生会館に移し、お茶を飲みながら懇親、交流を図った。



○コメント票：あなたが考える「大学の地域貢献」「地域に役立つ卒業生を育てる大学教育」

第一部終了後、コメント票への記入を呼びかけたところ 19 人 (52.8%) から、質問、意見、感想が寄せられた。(以下、コメント票より一部抜粋)

＜本学の教育ボランティア導入授業に関して＞

- ・大学の地域貢献が求められるなか、先進的かつ成功例となる取り組みに育っていると感じる。補助期間がある中で、どのように継続し発展させるか課題がある。
- ・「地域住民が育てる大学生」とあったが「育てると同時に自らも育つ」観点が必要なのだと思った。そのためにはやはり住民さん自身の育ち～学びを意識した「しかけ」も必要ではないか？
- ・本学の COC の場合、どうしても個としての地域住民との関わりに学生が注目しがちで「地域の課題」への注目が弱いのではないかと思った。
- ・高知大学の地域への入り方（協働）と神戸市看護大の教育ボランティアという関わり方の違いが面白いと感じた。教育ボランティアとして参加されている地域の方々はどのような思いで参加されているか、伺ってみたい。

＜教育ボランティアの活用について＞

- ・我々社会を経験して来た者にとっては、多種多様な場面に遭遇しそれに対する対処をし、経験を経て来た。このように培った知識が少しでも学生さんに役立てば良いと思う。
- ・教育ボランティアによる授業や演習の実施後、学生と教育ボランティアとの交流の時間があれば意見交換などができ、さらに学びも深まると思う。
- ・学生たちが、ボランティア活動をしてくれると、地域を知る、地域の活動を知ることになるし、地域も若い人たちの力がもっと欲しいと感じている。
- ・学生の考える健康食や健康講話、体操など地域に入り、企画や提案してもらっても面白いと思う。

【第二部 リレートーク・トークセッション】

ファシリテーター：中澤純治氏

司会：小巻京子（神戸市看護大学 地域連携教育・研究センター 助教）

地域住民の方々に参加していただいている授業が学生にどのような学びにつながっているか神戸市看護大学と高知大学の学生から、また、卒業後それがどのように役立っているかについては、看護師として働いている卒業生から聞かせていただいた。さらに、住民さんはこのような授業をどのように受け止めておられるのか、その効果や思いを話していただいた。また、トークセッションでは、出演者と来場者で質疑応答しながら意見交換をおこない大学と地域との連携のあり方を討議した。

○高山友希さん（学生：神戸市看護大学 4年生）



教育ボランティアさんに関わった授業のひとつに、患者さんに対するケアを想定して清潔ケアをさせていただく授業があった。普段の学生同士の演習以上に、教育ボランティアさんを対象にケアの計画から実施振り返りまでおこなったが、すごく緊張した記憶がある。病院での実習の前に、患者さんがケアを受けてどう感じるかを詳しく教えていただき貴重な演習をおこなうことができた。

また、3年生の健康学習論では、高齢者を対象と想定し転倒予防というテーマで、教育ボランティアさんに対して健康教育を行い、4年生になり保健師の実習で、実際に住民さんに同じテーマで健康教育をさせていただいた。3年生の健康教育で、私たちが想定しているよりも多くの質問や意見を教育ボランティアさんからいただき、それを実習に活かした経験がある。実際に地域で暮らす方に接することで、健康な方も病気を抱えている方も一人ひとり生活や価値観が違っていて、それらを大切にしたい関わりが必要であるということを実感することができた。

また、いままで歩んでこられた人生もひとそれぞれ異なるものであり、看護の対象となる患者さんに関わる際には、ひとり一人置かれている背景や人生にも目を向けて個別性をもった関わりをする大切さを教育ボランティアさんから学ばせていただいた。授業や教科書に書いてあることだけではなく、健康についてどんな思いを抱えておられるのかなど、実際の体験として生の声を聞くことができたし、それを実習や学内での演習に活かしたと思う。今後、看護職として働く際に会える患者さんや地域住民の方にもこの学びを生かしていきたいと思う。

○川瀬綾菜さん（学生：神戸市看護大学 4年生）

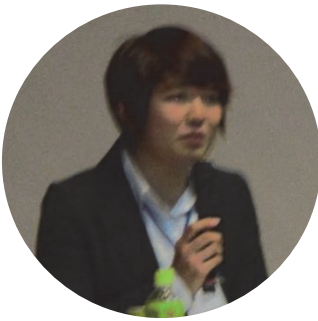


2 回生のときに初めて教育ボランティアさんに対して清潔ケアをさせていただく演習で、学生に対しても緊張するが、それとは全然違う緊張感があった。学生同士では言葉づかいも気にはするがラフな感じで、教育ボランティアさんに対しては大先輩であるので言葉づかいや医療用語の意味や説明の仕方を考えることができた。病棟実習では、受け持たせてもらった患者さんに「私のケアはどうでしたか？」とか聞けないが、教育ボランティアさんに協力していただく演習では、私たちのケアがどういうふうにとどこがよかったとか、こういうふうにしたらもっといいよというアドバイスもいただける貴重な機会だった。住民さんたちが暮らしている地域に出て健康チェックをさせていただく授業では、学校での教育ボランティアさんとは違う地域ならではの会話や、地域に住んでいるからこそその会話がされていることに気づいた。計測して基準値との比較を伝えただけで不安にさせてしまうこともあり、基準値だけを伝えるだけではなく、だからこう、とかそこからどういう生活をされているのかということも関連してみていくことが大切なんだ、ということを学ぶことができた。健康生活支援学実習でも菅の台地区、竜が台地区に行かせていただき、そこに住んでいる住民さんの生の声を聞かせていただいた。私が住んでいる地域と比べると、坂が多くバスの便が少なく、不便だと思っていたが、その土地に住んでいる住民さんならではの生活があるということがわかり、住民さん同士で支え合いながら健康維持の生活をされていることを知ることができた。領域実習は、先の地域の住民さんがよく行かれる病院に行き、健康支援学実習で地域の特性を知っていたからこそ、患者さんの退院後の生活を今の生活だけではなくてその先にある生活も具体的に考えていくことができたと思う。

○千頭里咲さん（高知大学 地域協働学部 2年生）

高知県の嶺北は山の中にあり、地域の課題や現状を高齢化、地域に元気がない、廃れているというイメージがあると思うが、実際に入ってみると結構元気で、60代とか朝走っているひともいるし、私たちが イベントをすると60代女性の参加者が多く、「あれ、全然違う」と地域に実際に入ってみてわかることだと思う。高齢化であるとか、高齢化率が何パーセントで超高齢化社会だといわれても実際地域に入ってみることで全然違うし、私たちが勝手に課題だと思っていることが課題ではなく、

むしろプラスに考えていくこともできる。だから、私たちが勝手に座学として知識として頭に入れるだけではデータの通りいかないというのが地域であり、自分からどんどん入っていかないといけない場所だと感じている。



地域のみなさんと信頼関係を築けていなければ、不安とかも直に言ってもらえないものである。信頼関係を築くことは、地域に入り課題を解決していくときのひとつのスキルで、私たちの学部ならではだと考えている。地域のみなさんからは、一番最初に入っていくとき必ずしも温かい対応ではない方もおられるが、どきどきしながらも学生なりに一生懸命やればそれに応えてくれる地域の方もおられるので、この事業は大切だな、学生がどんどん進んでいくことが住民のみなさんの考えを変える機会じゃないかなと考えている。

○八王子有紀氏（卒業生：神戸市立医療センター西市民病院 看護師）

去年卒業し、現在は看護師として働いている。先ほど高山さんと川瀬さんが話されたように、私も地域の方にバイタルサインを測り、地域住民の方のお家にかがいがい、地域住民の方にたくさんお話を聴かせていただいた。このようなCOCの授業で地域住民の方とかかわらせていただき、目をあわせて話すことや身体に触れるのがすごく大事なと感じている。例えば、熱が変わっていないとか血圧がいつもと変わらないということや「いつもとお変わりないですよ」という声かけだけでも患者様はすごく安心する表情をみせておられる。そういう声かけとか、目線とか身体の触り方、手を握る行為が患者さんにとって安心を与えているとすごく感じている。



地域の方のお家に行かせていただいたときは、例えばお花を飾っていたりとか絵を飾っていたりとか、その人の生活が見えて私はとても楽しくて、その人の人生が少し見えた気がしてすごくうれしかった記憶が鮮明にある。やっぱりこのCOCを受けないとそういうところが見えないのかなというふうに思っている。このCOCの授業を受けて地域住民の方からアドバイスや価値観、人生観など様々なお話を聞いたことが勉強になり、看護師として成長させていただいた。現在は看護師としての業務に追われていて、毎日忙しくせわしく働いているが、この半年間で印象的だったのは、80代の方で病院では病衣を着ていて、毎日同じベッドで同じ空間で4人部屋で過ごされていて、なかなかその人がどういう生き方をしていたのだからがみえなかったけれども、退院される時にすごく若いかわかいい服を着て、かわかいいサングラスをかけて「じゃあ帰るわ」って言われたときがすごくうれしくて、「あ、この人ってもともと地域の中で住み慣れた家でこういうふうに生活されていたんだ」というのがみえて、もっと早くからみれたらよかったなと、そのときに思った。やっぱり地域に入るってそういうことだなと、その人が地域の中でその人らしく自分の好きな事をして、自分の好きな服を着て楽しく過ごすことが一番だなと、すごく思った。だから病院で患者様が入院されているときは、ほんの人生の一部でしかないということやすごく感じた。だからこそ、その方の人生の岐路として少しでも支えてあげられればなと働いていて思う。

COCで地域住民の方から学ばせていただいたことが現在看護師として役に立っていると思うので、住民さんの評価で「自分の参加が教育に役立っていると思う」が50%以下だったのが、ちょっと悲しいと思った。なかなかない経験だと思うので、本当にありがたいなと思っている。もっと学生とかに自分が感じたことをありのままにおっしゃってくださったら、学生たちの勉強になると思っている。

○福田哲子氏（地域住民：菅の台地区民児協会会長）

COCという言葉が耳慣れず、当初お引き受けしたときにも「何をしていただけるの?」「何をやるの?」というような感じだった。はじめは、地域で月に1回おこなっている1人暮らしの方への給食サー



ビスの場だったが、来られた方はすぐに帰られてしまい、健康チェックをするときには人数が減っていてなかなか学生さんたちの訓練にもならない、チェックもうまくいかないという状況だった。そのため、今年度は給食とは別日にしてみると、地域の方がずいぶん多く見えてくださり、5月2回6月2回とあったが、4回とも来られた方もあるなど、去年から含めても140名弱の方が来られて健康には意外と興味がおありだと感じた。それと、若い学生さんが親身になっていろいろと話を聞いてくださるということもよかったと思う。一般的な身体測定や血圧測定だけよりも、別ブースを設けた健康イン

タビューのコーナーで話を聞いてもらいたいという方が非常に多かったと思う。本来は病院で健康チェックを受けて医師や看護師にいろいろ話をしたいと思うけれども、病院は忙しくていらっしやる。診てもらう方は話を聞いて欲しいと思って行かれるのに、はい次はい次と流されてしまう状況の中で、地域での健康チェックと健康インタビューは、来られる方にとっては話を聞いてくれる人がいたということが、たぶん喜ばれたんだろうと思う。インタビューの様子を拝見するとなかなか席を離れられない方が多かったように感じる。教育ボランティアとしても学生さんを何人か引き受けさせていただき、「将来のことはどうしたいの?」と聞くと、淀みなくすらすらと将来こうしたいああしたいとはっきり答えてくれた。それは専門職につこうと思われているので至極当然なことであるけれども、ビジョンをはっきりとお持ちで言われたのがものすごく心地よく、ここの看護大の学生さんは期待大だなと思った。また、できれば本当は月2回とかではなく、月1回くらいのペースで地域に定着していただき、計測の1ヶ月、2ヶ月後学生さんによるフォローがあってもいいのかなとは思った。

○高橋千栄子氏（竜が台地区民児協会会長）

毎回地域の保健室を開催している間に様子を全部見に来ている。少ないときもあれば多いときもあったが、例えば地域での研修のときに私たち民生委員がひとこと「こういうのがあります。来てくだ



さい。」というお声かけが必要かなと思っている。参加された住民さんは、毎回計測されて帰られるときに「私で役に立つのかしら?」「私なんか役にたってる?」とおっしゃるので「十分役に立っています。」という「おばあちゃんなのにどんな役にたってるのかな?」とおっしゃるので、「失礼な言い方だけれど脈がとりにくいかもわからない、そういうなか学生さんが一生懸命脈をとっておられます。」というお話をすると、「じゃあ私たち役になっているのね。次も来るね。」と仰ってくださる。また、女性の参加者少ないのは体重測定があるときで、「体重を知られたらいやだ」と仰る。「誰も見ませんよ」と言っても「いやだ」とおっしゃり、その辺は気をつけてお誘いしようかなと思う。

菅の台に比べると竜が台は会場が狭く、例えばインタビューを受けていただく時に、みなさんに窮屈な思いをさせてしまう。もしまた続けてやるならば工夫が必要かなと思っている。2階も空いているけれども、高齢者の方は「2階までようあがらん」という方がおられる。ですから例えば、お部屋の外でするとかちょっと考えてみたい。

「自分の孫みたいな学生さんが来て脈を測ってくれる」と、みなさんとても喜ばれている。特に男性の方が喜ばれていて「若いおねえちゃんが手をにぎってくれた」と。(笑)「手を握ってるんじゃないかと脈をとってくれてるんですよ」と申し上げているんですけども。だからみなさんが喜ばれていることであればこれからもやっていけたら、と思っている。

【トークセッション】

高知大学の取り組みについて、学生は卒業してゆくが、学生一住民の関係の継続性への工夫への質問があり、地域連携インターは黒子として教員、学生と住民との窓口としての役割をもっていること、また卒業すると一から関係のやり直しになるが、卒業してからもその地域の行政職員としてや職を得てに移り住む、地元に戻ってからも交流を続けることもあり、新しい出会いと今までの出会いは続いていくことは間違いないだろうと感じているとの返答を得た。

他に、地域住民とコミュニケーションをとるための秘訣への質問やCOCの“Center of community”という言葉がわかりにくいのでCollege of communityにすると他の住民にも説明しやすいという指摘、学生に対して本学への入学を選んだ動機の質問があった。

【リレートーク・トークセッション総括】中澤氏

今回印象深かったのは、学生の話の中で「大変だったけどやってよかった」というところで、例えば、先ほど「給食を食べたらすぐ帰る」といわれていたが、そのような教科書に書いていないようなことが地域で学ぶことであり、その暗黙知をみなさんから教わり共有することで、教科書の補完ができるのではないかと思う。また、病院ではゆっくりお話できないけれども、学生とお話できれば病院とは違ったことを彼女達が提供できる、お互いに補完しあえる姿が見えたのではないかと思う。大学というのは、どこかの地域に存在し、地域の皆さんに支えられているが、これまで十分地域の皆さんのことを見ていなかったというよりか、ちょっと独りよがりだったかなというところがあった。それがようやく大学の教育を通じて変わり始めてきた、それが看護大であれば、今日お話いただいた努力によってそれが形になっていっているのではないか。われわれ高知大学の地域協働学部はまだ歴史が浅いが、地域における大学の役割を念頭に置き、人材育成や地域課題解決もやっていかないといけないと思った次第である。

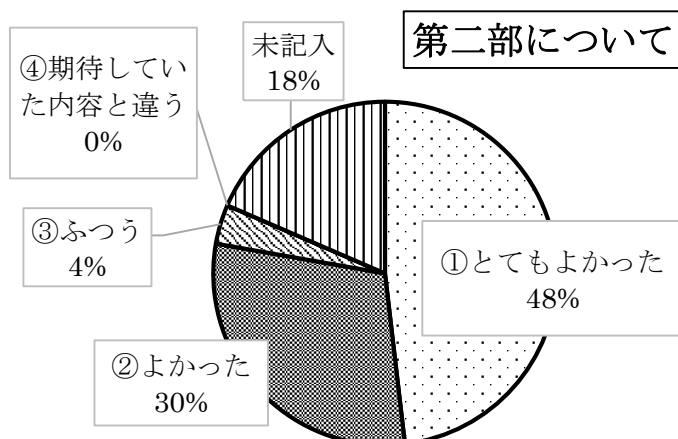
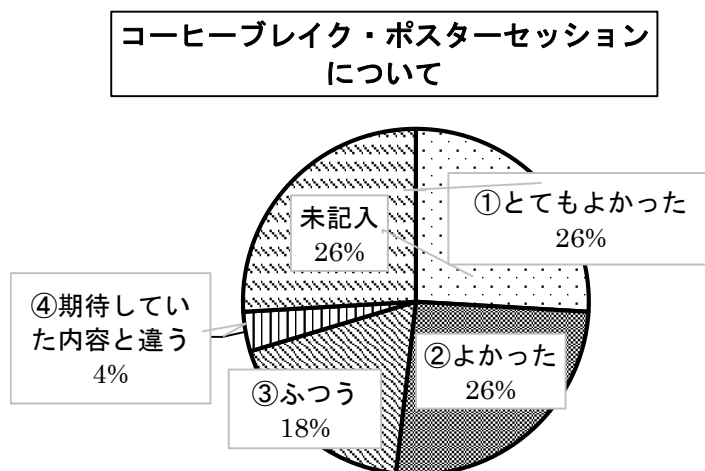
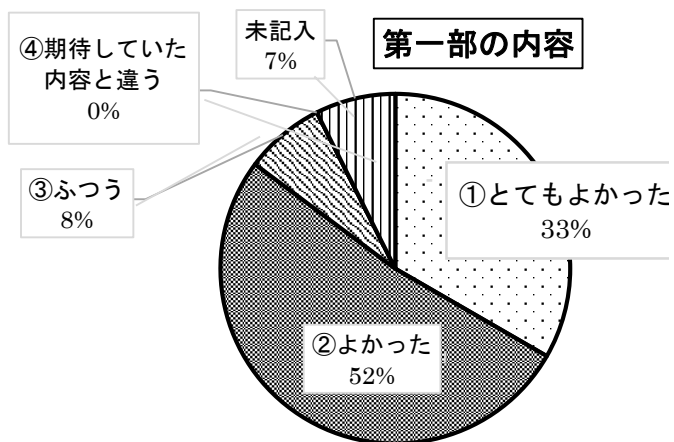
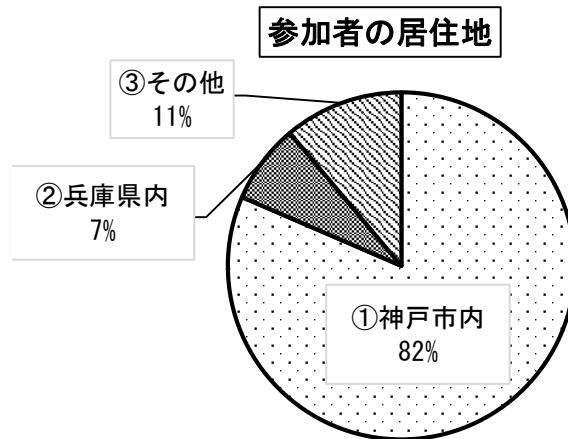
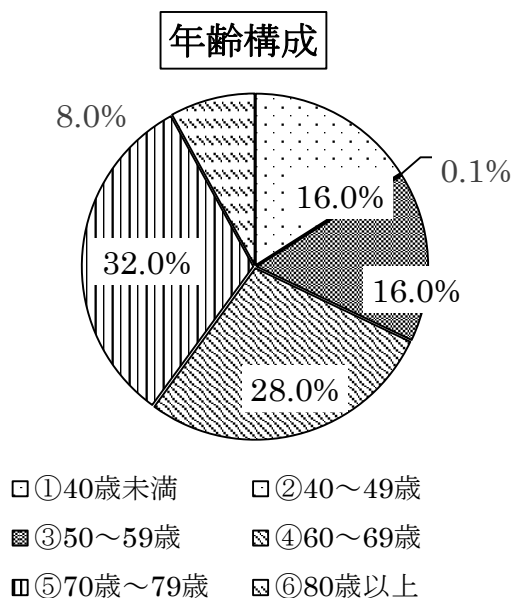


【閉会の挨拶 石原逸子（神戸市看護大学 教授）】

本学は今年で5年目を迎え、一応文科省からの助成は今年で終わりということになる。福田会長から月に1度でもいいから継続的に学生に参加してもらい、何らかの健康測定のようなこと、あるいはインタビューのようなことをしてフォローしていくのがいいのではないかと、高橋会長からも会場を広くしてというようなポジティブなお話をいただき、予算はないがさまざまな学業を通して地域のなかに出て行くことを考えている。特に竜が台地区と菅の台地域は長くご協力をいただいております、これからも継続的に一緒に学生を育てていきたいと、今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

【市民公開講座参加者アンケート結果】

●参加者 36名 アンケート回答者 27人（回収率75%）



○大学と地域住民との連携、協働についての意見（以下、一部抜粋）

- ・大学（学生）にとっても私達住民にとって相互に有意義なことだと思います。
- ・高齢化の中で若い人達がいるだけでその地域は活気づく。若い人たちが引っ張っていく地域作りは必須だと思います。
- ・最近、産学協働というシステムが生まれつつありこういった形で行うことは大変良い事と思います。
- ・地域の皆さんが「行きやすい、つながりやすい、大学の形が第一条件と思います。少くくらい遠くても10年くらいまえ12時～13時の体育館での体操は大勢集まりました。楽しみにしていた老人もいました。同じ様に学校に人を集める工夫はないものかと思います。

○今回の市民公開講座への意見、感想（以下、一部抜粋）

- ・学生の人材育成以外の地域貢献について整理してほしいと思った。
- ・学生さんの話をお聞きし教育ボランティアをして本当に良かったって思いが強まりました。
- ・千頭さんのような方が増えればいいと思いました。
- ・高知大学の取り組みを伺い、大変参考になりました。特に地域のニーズを吸い上げる仕組みがすばらしいと思います。
- ・如何に「地域協働」が大切であるかわかりました。これから社会の活性化は大事であるし高齢者が地域や子どもの関わり合いが必要とも感じています。
- ・地域も大学もそれぞれがんばらなくてはいけないなあと思いました。コーヒープレイクでは、交流が深まりいいアイデアです。
- ・卒後看護師になって実感できるCOCで得たものを下級生に伝えていってもらいたいと思った。
- ・学生のCOC事業に対する思いや住民さんの反応を聞いてよかった。学生が継続的に地域住民に関わり、地域課題への解決に向けた提案ができるようにすることが必要と思った。
- ・このような話は1回/1～2ヶ月あればよい。
- ・学生、教員、地域、行政とたくさんの方の思いがあるなかどのようにうまく調整し、またどのような苦労があったか、リアルな事の部分が気になりました。
- ・参加者の少なさにがっかりです。PRか対策を考えていただきたい。

<ふり返り>

今の学生は、インターネットやSNSなどでのコミュニケーションが主流を占めており、人と会って話す機会が少なくなっている。だからこそ「その人を尊重した看護」を学んでいる学生にとって、本学の教育ボランティアの方々からの直接的あるいは間接的な学びは非常に貴重で重要である。また、地域住民の方々にとっても教育ボランティアをしていただいたことが健康の維持・増進のきっかけになっていることや今後も期待していただいていることも合わせて、大学と地域にとっての双方向の効果があることを今回改めて確認することができた。

COC事業の締めくくりの年を迎えて今後の方向性を検討するにあたり、どの事業を残すかといった狭い枠組みではなく、どのような学生を育てたいのか、どのような大学でありたいのかというビジョンを元に方向性を定めることの重要性に改めて気づく機会となった。

（報告者：地域連携教育・研究センター 小巻京子）

2017年度 COC 事業における神戸市看護大学まちの保健室出前講座の実施

神戸市看護大学まちの保健室（以下「まちの保健室」）は、神戸市看護大学と兵庫県看護協会西部支部が協賛して実施している事業で、本学を拠点に地域住民の健康ニーズを考慮した活動を実施している。平成 26 年度からは COC 事業の該当地区である須磨区において「まちの保健室出前講座」として「もの忘れ看護相談」や健康推進に関わる健康講座を実施、また、「こころと身体の看護相談」については、ユニティでの相談事業をおこなっている。

1) もの忘れ看護相談出前講座

もの忘れ看護相談では、老年看護および地域看護を専門とする教員が、大学を拠点に認知症に関するミニ講義や個別相談を実施している。平成 26 年度からは COC 事業の 1 つとして、須磨区竜が台地区の民生児童委員を対象に、認知症に対する理解の促進や地域活動を共に考える出前講座を実施してきた(表 1)。これまでは講義中心であったが、前年度のディスカッションにおいて、「街で認知症ではないか？と気になる人をみかけても、知っている人でなければ声をかけることが難しい」といった声を受け、平成 29 年度は大学院生の企画で「地域で認知症を有する人を見かけたときの対応」をテーマとした講話とロールプレイを行った。

講話では、認知症の症状、徘徊をする高齢者の特徴など、認知症の基本的な知識だけでなく、書籍の一節などから当事者や家族の心情も紹介し、その後のロールプレイにつなげた。参加者の中にはロールプレイに苦手意識を持つ方もおられたが、大学院生が季節外れの格好で道に迷っている高齢者の役割を熱心に演じる姿に応えるように、認知症の人の状況に配慮した声かけなど講話内容を踏まえた対応を積極的に行う様子が見ええた。その後のディスカッションでは、「声をかけるのは勇気がいるが、まずは人として関わることの大切さがわかった」、「安心してもらうことが必要」、「認知症の人と関わる上での重要な学びを得られた」など、多くの感想がきかれた。

表 1 平成 26 年度～29 年度 「もの忘れ看護相談」 出前講座

開催日	テーマ
平成 27 年 1 月 8 日	神戸市看護大学「もの忘れ看護相談」の取り組みと認知症に関するミニ知識
平成 27 年 9 月 29 日	認知症とケアに関するミニ知識
平成 28 年 1 月 14 日	認知症と診断された方が住み慣れた地域で暮らすために
平成 28 年 11 月 15 日	認知症についての国や地域の取り組み
平成 29 年 10 月 3 日	地域で認知症を有する人を見かけたときの対応

2) 健康支援

COC 事業では、須磨区の住民の交流拠点に出向き、地域住民との交流を通して学ぶコラボ教育を実施している。平成 29 年度は、まちの保健室の「健康支援出前講座」として、コラボ教育の「基礎看護技術演習Ⅲ学外演習」で実施した健康測定の結果や、待機時間に記載していただいた健康チェック表の結果をもとに「元気にいきいき暮らしましょう」をテーマとした講話と体操を組み合わせて実施した。参加者からは、「体操して楽しかった」「気持ちよかった」などの感想が笑顔で聞かれた。

表 2 須磨区での健康支援教室

開催日	テーマ	場所	参加者
平成 29 年 9 月 14 日 (木)	「元気にいきいき暮らしましょう！」 講師：神戸市看護大学	竜が台地域福祉 センター	15 人
9 月 15 日 (金)	地域連携教育・研究センター 小巻京子	菅の台地域福祉 センター	20 人



3) こころと身体の看護相談

「こころと身体の看護相談」は、平成 19 年より毎月 1 回精神看護学を専門とする大学教員や大学院生が、こころの悩みを持つ人やそのご家族の看護相談に当たるものである。開催場所は、西区の大学共同利用施設である。広報活動は、神戸市看護大学前掲示板およびホームページへの掲載、「まちの保健室」のポスターへの情報掲示の他、「看護相談」独自のポスターを作成して、大学共同利用施設掲示板をはじめ、大学所在地の自治会を通じて大学周辺地域にある商業施設や診療所等の掲示板、回覧板への掲示・掲載を行っている。また、平成 25 年 1 月からは、従来の西区、垂水区に加え、須磨区の「広報 KOBE」（神戸市広報誌）にも年 2 回の掲載を行った。新規相談件数は、平成 23 年以降、主に 10 件台で推移している。新規相談者のうち、須磨区居住者は平成 25、26 年度に 2 件、平成 28 年度に 1 件、平成 29 年度は 1 件（H29 年度 1 月現在）である（表 3）。

表3 こころと身体の看護相談 相談件数の推移 (単位:件) ※H29年度1月現在

年度	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29
相談件数	48	58	71	96	120	75	116	73	98	78	63
新規件数	—	—	—	—	21	11	17	15	13	16	7
須磨区 居住者	—	—	—	—	—	0	2	2	0	1	1

4) その他の地域貢献活動

COC事業の該当地区である竜が台地区において、健朗会（老人会）の要請に応じて認知症につながりやすい疾患の予防について、生活上の留意点や認知症が気になった場合の相談先などについての健康講話と創作の体操による健康教室を実施した。

表4 健康教室実施内容

開催日	テーマ	対象・場所	参加人数
平成29年7月24日	「認知症の先送り」 講師：神戸市看護大学 地域連携教育研究センター 小巻京子	健朗会 竜が台地域 福祉センター	14人

(報告者：地域連携教育・研究センター 助教 小巻京子)